

Title	日本神話の研究(松本信廣著, 同文館発行)
Sub Title	
Author	松本, 芳夫(Matsumoto, Yoshio)
Publisher	三田史学会
Publication year	1932
Jtitle	史学 Vol.11, No.1 (1932. 3) ,p.137- 138
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	書評
Genre	Journal Article
URL	<a href="https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00100104-19320300-0138">https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00100104-19320300-0138</a>

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

## 日本神話の研究

(松本信廣著)  
同文館發行

神話は原始人や古代人が、自然や人生に對していだいた驚嘆、讚美、崇拜の心から生れた詩でもあれば、また彼等の素朴な人生觀、或は世界觀でもあり、彼等の自由な想像からつくり出された信仰の世界である。しかしながらあくまで物の本質を極めようとする、あくなき吾々の求真の念は、暴虐にもこのうるはしい神秘の殿堂をも蹂躪して、學問の光の中に發かうとする冒瀆を敢てする。即ち神話によつて自然民族や古代民族の精神生活、社會狀態のごとき民族文化をうかがひ得られる研究資料となすのである。幸ひわが國においては神話が獨特の發達をとげたのみならず、その神話研究の最もよき手引となるところの特異なる祭儀、信仰、習慣などが存在するのである。それにもかゝらず從來あまり神話學の發達をみることできなかつたのは、神話をもつて嚴然たる歴史的事實なりとし、それによつて國民精神を律しようとしたからであつて、この頑迷なる障害を打破するためには、神話研究は實に國民的信條に對して一つの叛逆を試みねばならぬといふ危険があつた。たゞ二三の賢明なる先覺、例へば故高木敏雄氏や、わが民俗學の權威柳田國男先生のごとき人々の努力によつて、この困難なる道が開拓されたがために、今やこの神話學に於いても天の岩戸の夜明のかゞやかしき、ほゝゑましき光が照り渡らうとしてゐる。即ちフランス學會叢書第一編として、松本信廣教授が『日本神話の研究』を公刊されたことは、わが神話學の上に新し

き光明をもたらすものとして、吾々の非常に欣快とするところである。

その序言に於いて教授の言へる如く、神話研究には種々の方法があり、殊に複雑なる日本神話には種々の方面から種々の方法によつて研究されうるのであるが、教授のとれる方法は、神話を祭儀と結びつけて考察する方法であつて、この點に本書の第一の特色がある。その内容は序言及び跋語をのぞいて、一、外者款待傳説考、二、豊玉姬傳説の一考察、三、笑ひの祭儀と神話、四、スサノヲノ命及び出雲の神々、五、我國天地開闢神話に對する一管見、六、蛭兒と日女、七、日の神の子孫の七篇から成り、その中一と四とはすでに本誌に掲載されたものである。二に於いては、女の國が異族の國であり、同時に食物を供給する國であり、之と縁故を有することによつて其人の幸福が保證せられるといふごく古い思想の痕跡が示されてゐるとなし、三に於いては、冬から春にかけての季節祭に死せる自然の力、豊饒のもとである太陽の女神に、回春を促すため必要であつた笑ひの儀式の影響によつて、天鈿女命の裸身顯露の神話が生まれたこと、五に於いては、日本開闢神話が太平洋神話の系圖型及創造型神話の部類に屬しながら、特殊なる地形風土と結びつき、季節祭を中心として發展したから、之を解釋するには種々の行事との關係をたどる必要のあること、六に於いては、蛭兒の話は同じく冬から春にかけて太陽のためによほされた祭と關係があること、七に於いては、天照大神の神話に日に仕へた巫女の生活との關係が窺はれ、さうして女巫の勢力が、次第に男巫に奪はれ、また幾つかの地方的信仰の中

心が大和朝廷のために吸収包含されたことを説いてゐる。いづれも弘く他民族、殊に南方太平洋民族の傳説との比較から、各物語の原始的意義を探り、さうしてそれらが季節祭の祭儀と密接の關係あることを明かにしたのであつて、いたるところ教授の創見をうかがうことができ、從來日本神話に於いて疑問とされた點の解明されたところが甚だ多い。

もとより本書は日本神話のあらゆる問題を論じつくしたものでなければ、またその論ぜられた範圍内に於いても、若干の希望がないでもない。例へば季節祭そのものに就いてもつと考證してもらひたい希望が起り、また研究方法に於いても、特に多くの異傳のある場合、一應本文批判が必要ではなからうかなどいふかすかな疑念を湧く。しかしこれらは吾等の單なる希望や印象にすぎないのであつて、もちろん本書の價値に何等關係あるものではない。教授は夙に柳田國男先生の學問の影響をうけ、更に在佛四年間フランス社會學派の下に研究せられ、既に在佛中、日本の言語、神話に關する二著述を公にして、世界の學界に知られたる新進學者であり、本書はまさに教授にとつて歸朝後第一の成果として記念すべきものであるばかりでなく、わが學界にとつてもまた大なる收穫であり、その新鮮にして該博なる知識は、斯界の視野を著しく擴大し、深めるであらう。(松本芳夫)

### 寛政三博士の學勳 (内田周平述)

本書は孔子祭典における内田周平先生の講演であつて、朱文公

生誕八百年記念として、文公の靈にきゞげられたものである。

松平定信が前代田沼の弊政を改めて幕政を緊肅せんがために種々の改革をしたが、その中學問の獎勵は殊に注意すべきものであつて、所謂寛政の三博士、即ち柴里栗山、岡田寒水、尾藤二洲を登庸して學制改革をした。本書はまづ寛政の學制改革と題して、三博士が朱子學の硬派たる崎門の學、その軟派たる林家の學、及びその硬軟二派の間に位する木門の學の、『或はその一に屬し、或はその二を兼ね、能く三派の長處を調和して、之を實用に施し、以て當時の學弊を救済した』ことより筆を起し、當時の學界の弊害を叙して儒者が文人に墮落したこと、従つてその改革の必要であつたことから、三博士起用の顛末、及び學政改革、即ち異學の禁の大略をのべ、ついで三博士の師友關係と題して、三博士の學問人物を完成せしめたるその師、及び三博士を補佐してその改革を遂行せしめたるその學友についてのべ、もつて三博士の學統を明かにし、最後に世にあまり知られざる三博士の逸話を紹介して、いづれも名利に走らず、節義を重じたる人物であつたことをのべ、古の學者と今の學者とを比較論評して後者に大なる戒を與へられた。僅か四十七頁の小冊子ではあるが、要をつくしてよく三博士の學勳を明にされ、日本の儒學史、或は教育史の一節としても誠に重き文獻である。(松本芳夫)

### 歐米に於ける支那古鏡

(梅原末治著  
刀江書院刊)

本書は、梅原末治氏の三年四ヶ月に亙る歐米留學及び再度の入